GINZA, ART & GINZA SIX

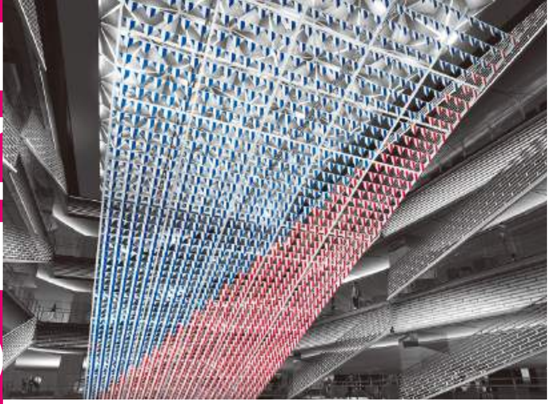
GINZA, ART & GINZA SIX

GINZA SIX
MAGAZINE
ART ISSUE 2018

GSIX

DANIEL BUREN SETS THE SCENE

4月20日に開業1周年を迎えるGINZA SIX。
フォーカスするのは、人々の感性を刺激するアートだ。
最注目はダニエル・ビュレンによる新たなビジュアルワーク。
世界的アーティストが語る今回の作品、日本への思いとは？



GINZA SIXの中央吹き抜けに登場するビジュアルワーク。白と青と赤のストライプによる1,500枚の旗は斜面状に配され「空間に対角線が入ることでダイナミックな印象を与えます」（ビュレン）。展示は4月2日〜10月31日予定。
〈Like a flock of starlings : work in situ〉Daniel Buren 2018 ※Image
©DB-ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2018 G1226

銀座の目抜き通りで、GINZA SIXのエントランスが面する全長1,100mの中央通りも、館の吹き抜けと連動したビュレンの旗がアートジャック。こちらは4月2日から5月6日までの約1カ間のみの展示となる。
〈Following the triangles : a work in situ for GINZA Chuo Street, Tokyo 2018〉※Image
©DB-ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2018 G1226

Q. GINZA SIXでの作品のテーマとは？

A. 私の作品にはテーマというのはほぼありません。そうした仕事の仕方はしていないからです。ですから、手厳しく答えるとしたら、テーマは全くないということになります。私の作品は常に、与えられた空間とある方法論によって生まれます。今回はGINZA SIXの資料を見て面白いと感じた中央の吹き抜けを、どう変化させるかを考えました。

Q. 他の作品にも用いられている、今回のタイトル『Like a flock of starlings : work in situ』にある“in situ（その場所で）”とは？

A. ラテン語の『in situ』という言葉は、フランス語でもそのまま使われています。しかし、ビジュアルアートの世界に用いたのは、ある意味、私がはじめてでした。多くのアーティストがそれに準じましたが、私のいう『work in situ』とは場所との関係性から生まれる作品のことです。その場所でしか見ることができず、100のうちの99はその場所で壊され、他に移すことは不可能です。目には見えない歴史や、そこに関わっている人々からインスピレーションを得ていることも重要です。

Q. 中央吹き抜けの作品は、どのような方法論から生まれたのでしょうか？

A. まず吹き抜けの最上階から2階まで、全てを覆う斜面図を作りました。そこに、千以上の小さい旗を取り付けています。ひとつひとつの旗はくっつき合うように。また、後ろと前が重なり合うように。遠近法で見ると、それは床か天井のように見え、斜めから見れば、壁のようにも見える。下から眺めれば、館内の様子がその隙間から見える。つまり、人々が店内をどう歩くかによって見え方が変わってくるのです。今回の作品は、吹き抜けへの理解を大いに変化させるのではないかと思います。

Q. 中央通りの作品に関しては？

A. 旗は自分の仕事において、長く使用しているエレメントです。館内の旗の形と、その旗と旗との空隙が作る形を写し取って、その部分を白く塗りつぶしたのが、中央通りの旗になります。中央通りの端から端まで、青と赤、2色の旗を交互に設置しています。

Q. タイトル『Like a flock of starlings : work in situ』の“flock of starling（ムクドリの群れ）”についても、ご説明いただけますか？

A. 下絵ができたとき、何千ものムクドリが飛行する様子が思い浮かんだのです。ムクドリの大群がいっせいに向きを変えた瞬間に、黒から灰色へと素早く色が変わるように見える美しい光景。フランス語のタイトルでは《Comme un vol d’étourneaux（ムクドリの飛行のように）》と名付けています。

Q. 今回の作品はパブリックアートとして、社会にどのようなインパクトを与えると思いますか？

A. 私の場合、そうしたことを思い巡らすことはありません。多くのアートのように結果をコントロールしたくないのです。作品は個人的な知り合いのためでも、美術館やアートに興味のあるパブリックのためでもなく、全ての人に向けられています。今回のような商業施設もストリートと同じようなもので、あらゆる人々が入り交じる場所です。彼らには自由に思いを表現する権利があります。

Q. 50年来、作品にストライプを用いていますが、その存在は長い時間の中で変化してきましたか？

A. 1965年に使い始めたときには、これほどまで長く使うとは思ってもみませんでした。当初の作品ではある場所に加えた、単なるビジュアル装置でしかありませんでした。年月が経つにつれ、ストライプだけでなく他のエレメントも加えるようになり、やがてストライプを本格的な徴（しるし）として使うようになり、様々な示唆を行うに至りました。例えばある50人のグループ展の一角に、私の新しい作品があるとします。私の作品を知っている人が、作中のストライプを見れば「Daniel Burenの作品だ」と認知できる。そのうえで、昔の作品と比較しながら新しい作品を理解できる。言葉なくして認知させることが可能だからこそ、ビジュアルとして面白いのです。

Q. 作品に用いる色はどう決めていますか？

A. あえて自分で選ばないことがよくあります。私にとって昔から色は大切な素材であり、初期の段階から作品に取り入れてきました。色は造形芸術という領域において、唯一見ることによってでしか定義できず、言葉では表せないものです。例えば私が赤を使って作品を制作するといったら、どんな赤を思い描いているのか誰も想像できないでしょう。さらにその赤という色について説明するとしたら、いっそう複雑になる。様々な可能性がありすぎて、言葉で限定できないからこそ、興味をそそられるのです。そのため当初から色を素材として使用し、主観を決して持ち込まないよう、計略を試みてきました。

Q. 最後に日本に対する特別な思いはありますか？

A. 日本は最もよく行く国のひとつです。200回は行き来しています。1970年に初めて日本で仕事をし、これまで様々な場所を訪れる中で、日本の文化特有のあり方に魅惑され、仕事においては「借景」という言葉すら用いています。借景の概念を知ったとき、素晴らしい言葉だと感銘を受けました。私は芸術界でいう“アプロプリエーション”（既存の作品やイメージを自作に用いる手法）にずっと反対の立場を取ってきました。極端に言えば作品を奪ったり、盗んだりすることになるからです。だからこそ「借りる」という考えは正反対で興味深く、西洋はもとよりフランス語にない考え方の違いを表した言葉でもあり、その一方で、私は「借景」という言葉を知る以前から、共通の概念で作品を制作していたといえます。なぜなら、私の作品はその場所がなければ存在しない。そして、その場所は作品の一部ですが、私の所有物ではないのです。一定の期間、その場所を使わせてもらうこともあれば、常設なら、期間が長くなるだけのこと。例えばピカソの作品は彼のものであり、置かれる場所とは全く関係がない。対して、私の作品の場合は99％が借り物です。その気づきは少なくとも日本で学んだことのひとつです。（2018年3月1日 パリにて）||||||||

ダニエル・ビュレン

1938年、パリ（フランス）生まれ。美術家。1965年から自身の論理に基づいた8.7cm幅のストライプ模様の作品を手がけ、絵画、彫刻、壁面、建物など幅広いメディアに展開。これまでに数千点以上の作品を制作。1986年フランス代表としてヴェネチア・ビエンナーレで「金獅子賞」を受賞。2007年高松宮殿下記念世界文化賞受賞（絵画部門）。日本でも数多くの芸術祭に参加、恒久設置を行ない、現在も世界各国でプロジェクトが進行中。2018年はケムニッツ（ドイツ）、シドニー（オーストラリア）、ミネアポリス（アメリカ）で展覧会が開催予定。

March 2018 in Paris

DANIEL BUREN'S STORY SO FAR

Fondation Louis Vuitton, Paris

華やかに翻るストライプの旗で、
ＧＩＮＺＡ ＳＩＸと銀座の中央通りを一変させる。
ダニエル・ビュレンの大胆なアートは、
これまでも世界各地で空間を変えてきた。
彼のアートはどうしてこんなに人々を惹きつけるのだろう？
そしてなぜ、彼はこのようなアートをつくり続けているのだろうか。
ここでは、その背景をしばし紐解きたい。

フランク・ゲーリー設計、ガラスの帆をテーマにした「フォンダシオン ルイ・ヴィトン」のダイナミックな建築全体を、13色のストライプのパネルで覆った「Observatoy of Light（光の観測所）」（2016年）。
建築との深い対話のもと、新たな光とその移ろいの中で建物と風景を一変させた、ビュレン作品の真骨頂。
©Iwan Baan / Fondation Louis Vuitton

Piazza Verdi, La Spezia

Walking, work in situ, permanent installation, Piazza Verdi, La Spezia, Italy, 2009–2017
©DB-ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2018 G1226

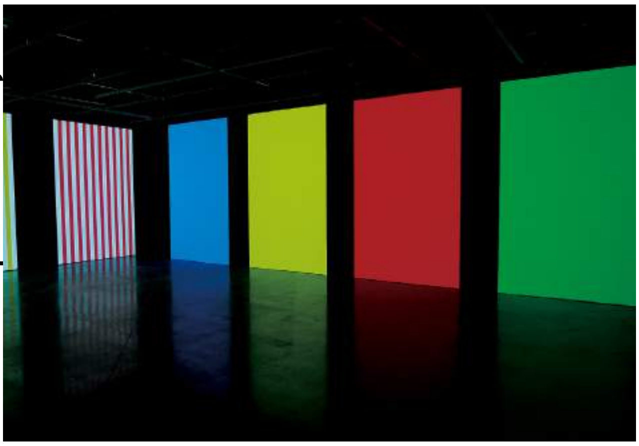
Tottenham Court Road Station, London

"Diamonds and Circles," work in situ, permanent installation, Tottenham Court Road Station, London, UK, 2008–2017 ©DB-ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2018 G1226

Museum of Modern Art of Bogotá, Bogotá

Installation view, "From Half Circles to the Full Circles: A Coloured Journey," work in situ, Museum of Modern Art of Bogotá, Bogotá, 2017 ©DB-ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2018 G1226

Centre Pompidou, Malaga



Installation view, "Projections / Rear Projections," work in situ, Centre Pompidou, Malaga, 2017 ©DB-ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2018 G1226

Kenpoku Art, Ibaraki

In the corridor : the Four Rainbows, work in situ, Daniel Buren for KENPOKU ART 2016, Japan ©DB-ADAGP Paris photo ©Keizo Kioku

ダニエル・ビュレンが最初にストライプを使うようになったのは、1965年のことだった。フランスでは当たり前のありふれたベッドカバーのデザインからインスピレーションを得たという。以来、半世紀以上にわたって独自のストライプ（8.7cm幅の白と色による縦縞柄）を一種の道具として作品制作を続けている。パリのパレ・ロワイヤルにある白黒のストライプが施された円柱は、見たことがある人もいるかもしれない。日本でも新宿アイランドに、建築物とストライプが戯れるパブリックアートの作品がある。また最近ではストライプだけでなく光を取り入れた作品にも取り組んでいて、パリ・ブローニュの森にあるフォンダシオン ルイ・ヴィトンのガラスのファサードをカラーフィルムで覆ってみせた。日本では「KENPOKU ART 2016 茨城県北芸術祭」で、日立駅の通路を色鮮やかな光が差し込む空間に変えて人々を驚かせた。今年で80歳になるが、今なお精力的に、世界各地で作品を展開している。

GINZA SIXのアートワークを監修する東京・森美術館館長の南條史生がビュレンを選んだ理由は、「草間彌生に拮抗するだけの強さを持つアーティスト」だったから。開業から約1年にわたり吹き抜けを飾った草間の赤い水玉の南瓜は、本当に大きなインパクトがあった。が、ビュレンももちろん負けてはいない。今回は吹き抜けに多数の旗を設置する。さらには中央通りにも作品が出現するが、銀座の表通りに現代美術が飾られるのは実は初めてのこと。空間に合わせて作品をつくるタイプのアーティストであるビュレンの作品は、「その場所にどのような特性があるのかを素早くつかんで巧みにアートを挿入する。銀座も彼のアートで染まり、人々に驚きをもたらすと思います」（南條）。

アート界においてダニエル・ビュレンはしばしば「1960年代を代表するコンセプチュアル・アーティスト」と称される。コンセプチュアル・アートとはコンセプト、つまり概念やアイデアを表現する芸術のこと。実物の椅子、椅子の写真、椅子についての百科事典の記述を並べたジョセフ・コスースや、年月日を表す数字だけを書き続けた河原温などが代表的な作家だ。ビュレンの場合、コスースのように文字を使うわけではなく、カラフルなビジュアルで風景の中に調和し、ときに屹立するアートをつくる。環境の中で概念を表現する独自の方法論を持っている、稀有なアーティストだ。

ビュレンは大半の作品でストライプを使っているので、いつも同じことをしていると思う人もいるかもしれない。だが、その使い方は異なる。ストライプはあくまでも絵の具であって、その絵の具でいろいろな絵を描いているのだ。

彼にとって美術館の中だけでなく、屋外にも作品を設置していることが重要だ。今回のGINZA SIXのように限られた期間だけ設置されるものもあれば、恒久的に置かれるものもある。あるとき彼がスイスのレマン湖にストライプの帆のヨットを浮かべたことがあった。しかし1カ月後にはそれを美術館に並べて見せた。すると人々はそれをアートだと言った。では美術館に置けば単なるヨットの帆がアートになるのか？ アートとは美術館が規定するものなのか？ 美術館の外にあるものはアートではないということになるのか？ ビュレンの作品はいつもそんな哲学的な議論と問いかけをはらんでいる。

一方でビュレンは美術館の中でもウィットに富んだ"問題"を仕掛ける。あるときは威風堂々とした歴史美術館に飾られているレンブラントなどの絵の裏にストライプを施した。絵の横には、ビュレンの作品のクレジットも掲げられている。そこで観客はどこにビュレンの作品があるのだろう、と探すことになる。ビュレンのアートは確かにそこに存在しているが、誰もそれを見ることはできないという仕掛けだ。展示室の監視員の制服にストライプを付けたこともある。監視員が歩いていくとビュレンのアートも移動する。クラシックな美術館の中を彼のアートが動き回っているのだ。ビュレンは若い頃、美術理論に関する本も書いていた。「彼の作品はアートと、アートでないものとの境界線を探っているのです」と南條は言う。

1981年に日本で企画された展覧会でも、パネルにストライプの紙を何枚も貼り重ね、それを剥がすというパフォーマンスを行った。パリの街角でよく見られる、何枚も重ねて貼られたポスターが剥がれて、下のポスターが覗く光景を思わせる。剥がすことで描くようにも見える。「ビュレンは本当にびっくりするようなことを考える人だと思いました」と南條は振り返る。

GINZA SIXの吹き抜けだけでなく、銀座の中央通りで風に翻るカラフルなストライプの旗は見慣れた景色を一変させ、わくわくした気持ちにさせてくれるに違いない。予想もしないところに現れたアートが移動遊園地のように、その場所を光り輝くものに変えて人々を笑顔にする。そんなビュレンのアートのマジックを、東京・銀座で大いに謳歌したい。

MEMORIES OF ART AND GINZA

8人が語る、アートと銀座 わたしの記憶。

南條史生

1980年代半ばに雑誌『美術手帖』の展評を担当することになって、銀座に集積する画廊を1年間、そのために50ccの原付バイクまで買って、月に100軒くらい見て回った時期があった。ただ、当時のアートは画廊の中に収まっていたのに対し、今は外にも出て行くようになり、銀座ではエルメスやシャネルをはじめとする企業のギャラリーが先進的なアートを紹介する時代になった。そんな流れの中でGINZA SIXもアートを明快に打ち出していて、アートと銀座の関係がリバイブしてきているのと、この4月から中央吹き抜け空間での展示が始まるダニエル・ビュレンのように、今後は街とインタラクティブな関係を結ぶことができる生きた現代美術作家の存在がより重要になってくるように感じている。

なんじょう ふみお　1949年生まれ。森美術館館長。国内外の芸術祭のディレクターを歴任。近年では「茨城県北芸術祭2016」、「ホノルルビエンナーレ2017」など。

石坂泰章

絵画の裏面の色褪せた銀座の画廊のシール。そういうものに出合った瞬間、さまざまな思いが脳裏をよぎる。50年前にこのピカソを扱ったのだろうか？ それが今、こうやって海外にあるのだろうかと。そう、これこそが銀座が昔から進取の気性にも富んでいたなによりもの証だ。そういった銀座の画廊が、1990年代末頃からひとつまたひとつと消えてから久しい。

そこにGINZA SIXの「THE CLUB」という画廊が誕生した。銀座 蔦屋書店の一部門であるものの、企画はオークション会社サザビーズで現代美術の担当だった元同僚に任されている。ボエッティ、ブラジルの中堅作家等、世界的には知られているものの、日本であまり見かけない現代美術の作家を紹介している。最初半信半疑だったが、結構繁盛しているようだ。それも海外のお客様との取引が半分を占めるという。大手資本、元オークション会社、海外の顧客という異色の組合せ。銀座の画廊の今後の方向性を示唆している。

いしざか やすあき　1956年生まれ。アートアドバイザリー、株式会社AKI ISHIZAKA代表取締役社長、東京藝術大学非常勤講師。2005年～14年サザビーズジャパン代表取締役社長。『Forbes JAPAN』『文春オンライン』などメディアでの連載も多数。

長谷川智恵子

昨年、日動画廊は創業90周年を迎えたが、初代の長谷川仁が銀座に画廊を開いたのは昭和6年のことである。その2年後、巴里帰りの藤田嗣治がぶらりと画廊に入ってきたという。長谷川は早速、個展の開催を願い出、それ以来、戦争で不穏な空気に包まれるまで、毎年のように個展を開いている。銀座の中心地の賑わいは、藤田にパリの画廊街を思い出させたのかもしれない。戦後、藤田はアメリカ経由で巴里に戻った。今年は藤田の没後50年となる。

銀座が「大人の散歩道」と呼ばれるのは、日本で一番、画廊が多いことも理由のひとつであろう。アートに触れながら銀座を散歩するのは、このうえない大人の楽しみなのである。

はせがわ ちえこ　日動画廊副社長。公益財団法人笠間日動美術館副館長、日本洋画商協同組合理事長、財界人文芸誌『ほおづゑ』編集長。近著に『「美」に生かされて』（三好企画）。

宮城俊作

東京・銀座は、街並みそのものがすでにアートギャラリーです。壁面線がきれいに揃った中央通りに軒を連ねる建物は、その間口の狭さゆえに、垂直方向に延びる個性的なファサードが通りを隔てて際だって見えます。中央通りから一歩入れば、今度は人の目線の高さで、低層部の様々な商いの様子がヒューマンスケールの表情となって、目を楽しませてくれます。そして、もし将来にわたって銀座にもうひとつの街並みのアートが生まれるとすれば、それはおそらく建物の屋上に立った時に見える、天空とのインターフェイスがつくりだすものではないかと思います。銀座の街と空の間には、まだまだ多くのアーティスティックなインスピレーションが潜んでいるように感じます。

みやぎ しゅんさく　1957年生まれ。ランドスケープアーキテクト。主なデザインに平等院宝物館（京都）、GINZA SIXガーデン（屋上）他多数。

田辺夕子

近年『銀座百点』で連載を持っていただいたアーティストがいます。一人は荒木経惟さん。銀座7丁目に本社ビルがあった電通にカメラマンとして就職した1960年代にこの街を撮り始めた彼は、その普遍的なテーマである生と死、昼と夜などと同様、今も昔も人々がおめかしをして闊歩する4丁目の交差点と、同時に名画座で知られた今はなき銀座シネパトスといった、人間の欲望が渦巻くアングラな地下空間のコントラストを愛しました。もう一人は山口晃さん。屋上からガード下まで、彼ならではの切り口で銀座を歩き描いていただいたエッセー漫画には、毎回ユーモアたっぷりな一方、独自のシャープな観察眼を感じていました。

すなわち二人に共通するのは、一面的な銀座だけをよしとしないこと。これからもアーティストたちの美意識に応え、創作意欲を掻き立てる街であり続けるために、表裏や新旧といった両方の銀座への視点を大切にしていきたいと思っています。

たなべ ゆうこ　1955年創刊の日本初タウン誌『銀座百点』編集長。なお、山口晃氏による連載「当世 銀座探訪」は氏の新刊『すゞしろ日記 参』（羽鳥書店）にも収録。

杉本博司

巴里のマロニエ、銀座の柳、と歌われた昭和の銀座。私はそんな銀座の柳とともに育った。私が成人した1968年、その銀座大通から柳が突然消えてしまった。学生運動が高揚し過激派は機動隊との攻防で歩道の石を剥がし機動隊に向かって投石を続けた。銀座の柳も投石防止の舗装化と共に消えたのだ。あの嵐のような私の青春時代、混乱の中にも希望の光があった。今年ソニービルが消え、白いバラのネオンの火も消えた。昭和の銀座は、私の脳裏に鮮明に現れてはまた消えてゆく。

すぎもと ひろし　1948年生まれ。現代美術作家。1974年よりニューヨーク在住。国内外の個展と受賞（章）歴も多数。2017年にこれまでの活動の集大成として文化施設「小田原文化財団 江之浦測候所」をオープン。

岩渕貞哉

『美術手帖』編集部に入った2000年代初頭頃、新人編集者にとって「銀座画廊めぐり」は欠かせない活動だった。新橋から京橋に向けて、半日かけて画廊を10数件回って、貸画廊などで発表する若いアーティストを見出していく。暑い真夏などはかなりハードだったけれど、その経験が自分の美術を見る基礎的な目をつくったように思う。僕にとっての銀座は、小さくも意欲的な画廊が多く集まる場所だったが、近年自分と銀座との関わりが変わってきた。

例えば、資生堂ギャラリーが行っている若手アーティストの公募展「shiseido art egg」の審査をしたり、GINZA SIXのアートにフィーチャーした銀座 蔦屋書店では美術書の棚づくりを手伝ったりしている。訪れる場所は変わっても、新しい才能を見出し、新しいアートファンをつくっていくエネルギーに溢れたアートの街・銀座は、僕にとって変わらず重要なものであり続けるだろう。

いわぶち ていや　1975年生まれ。今年で創刊70周年を迎えた『美術手帖』編集長。現在は世界の作家集団を特集した『アート・コレクティブ』（2018年4月号）が発売中。

橋本麻里

質の高い現代美術ギャラリーや古美術商が集まる銀座で、売買や展示とは異なる文脈で美術作品と接することのできる、いかにも銀座らしいと思える場所が、7丁目のフレンチレストラン「ロオジエ」だ。「ロオジエ」では目の前に料理や飲み物がなかったとしても、壁面にかかるソニア・ドローネのタペストリーや、ジャン・コクトーのオブジェなど「目で味わう」美術品を眺めているだけで十二分に愉しめる。こうした作品で店を飾るようになったのは、1986年からシェフを務めていたジャック・ボリー氏の要望で、「ロオジエ」が銀座・並木通りに面した資生堂本社1階に移転した1999年以降のこと。2013年、ビルの建て替えに伴うリニューアルオープンにあたっても、若手作家の作品を中心に30点ほどを新規に購入。以前からの作品と混在させながら、一段軽やかで明るい印象にリフレッシュし、ゲストの眼を喜ばせている。

はしもと まり　日本美術を主な領域とするライター・エディター。公益財団法人永青文庫副館長。新聞、雑誌等への寄稿のほか、NHKの美術番組でも解説。著書に『美術でたどる日本の歴史』全3巻（汐文社）他多数。

GINZA ART SPOTS TO SEEK OUT

コンテンポラリーアートのギャラリーも充実するアートの街、銀座。その主要スポット10軒を紹介。

Artglorieux

アールグロリュー

400年の歴史を持つ大丸松坂屋百貨店を母体に運営されるアールグロリュー（フランス語でart（アール）は芸術、glorieux（グロリュー）は輝かしい・栄光の意）。常に5年後を見据えた企画に挑戦していこうと、有望な若手作家の作品や海外でも通用する日本のアートを積極的に展開。インテリアデザインは独立まもない気鋭の建築家・鬼木孝一郎に依頼、モノトーンを基調としたエントランスや斜めの壁面を取り入れた空間で、アーティスティックな異世界を出現させている。「Artglorieux Selection」（4月5日〜18日）では、金属箔を使った作品で国内外に知られる裕人礫翔（ひろと らくしょう）をはじめ、取扱作家たちの秀作が出揃う。

Q.美術部門バイヤー小川貴司さん、銀座でオススメのアートスポットは？

A.東京画廊「日本でも屈指の老舗画廊さん。銀座を語る上で外せない存在です。訪れるたび、いつも勉強させてもらっています」

東京都中央区銀座6-10-1 GINZA SIX5F Tel.03-3572-8886 Open 10:30〜20:30 不定休

昨年9月に開催された裕人礫翔展・会場風景。

AKIO NAGASAWA GALLERY GINZA

アキオ ナガサワ ギャラリー ギンザ

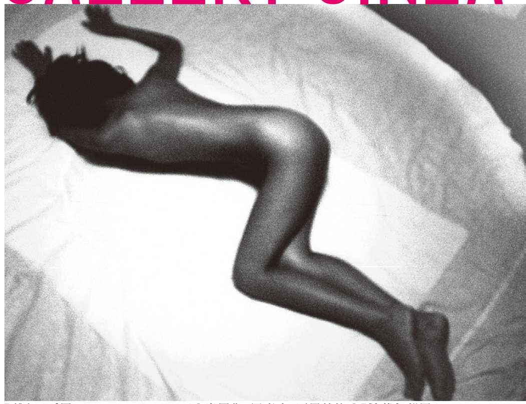
アートの活動を音楽になぞらえ「作品集はアルバム、展覧会はライブ」と語るのは、ギャラリー運営と出版事業を展開するオーナーの長澤章生さん。例えば展示壁の全体をポップな写真イメージでアレンジして観客を驚かせた昨年の「Daido Moriyama - Pretty Woman」も、写真作品の魅力をより幅広い人々に知ってもらいたいと、作家との二人三脚で実現させたものだという。5月27日まで開催中の「グループ展 / Group Exhibition」では、石黒健治、細江英公、森山大道他、攻めの姿勢を貫く計8作家の作品を展示。

Q.ギャラリーオーナー長澤章生さん、銀座でオススメのアートスポットは？

A.和光 銀座のウィンドウディスプレイ「他にはない独自の世界観に、銀座の看板を背負っているという矜持を感じます」

東京都中央区銀座4-9-5 銀昭ビル6F
Tel. 03-6264-3670 Open 11:00〜19:00 月火休

©Kenji Ishiguro courtesy of the artist and Akio Nagasawa Gallery



「グループ展 / Group Exhibition」の出展作、写真家・石黒健治の「希薄な部屋」。

GALLERY KOYANAGI

ギャラリー小柳

コンテンポラリーの、特に写真を使った作品を国内で先んじて扱ってきた。原美術館でのソフィ・カル展（1999年）や森美術館での杉本博司展（2005年）など所属作家による大規模個展は、1995年のオープン以来、このギャラリーが先駆者として実現してきた数多くある成果のひとつといえる。現在開催中の「東芋→中川幸夫」展（終了日未定）では、昨年ロサンゼルスのハマー美術館で発表されて好評を博した束芋によるウォールドローイングとともに、あるがままの花の命を見極め続けた華道家・中川幸夫の写真作品を展示。彼らの花に対峙する姿勢に、表現者の凄みを感じずにはいられないだろう。

Q.ギャラリー代表の小柳敦子さん、銀座でオススメのアートスポットは？

A.シネスイッチ銀座と ル ステュディオ エルメス「アートを語る上で映画は欠かせません。どちらのミニシアターもプログラムが充実しています」

東京都中央区銀座1-7-5 小柳ビル9F Tel. 03-3561-1896 Open 11:00〜19:00 日月祝休

ウォールドローイングにプロジェクションを掛け合わせた束芋「flow-wer arrangement」の展示風景。

CHANEL NEXUS HALL

シャネル・ネクサス・ホール

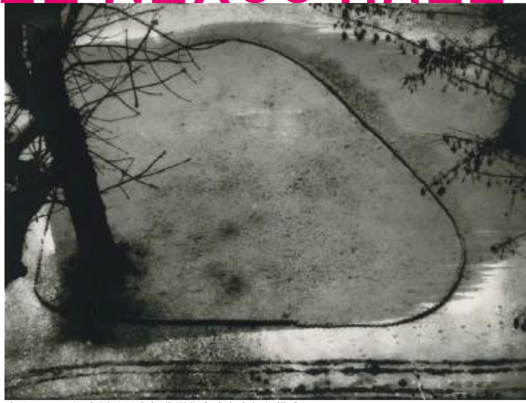
芸術を愛し支援したシャネルの創業者ガブリエル シャネルの精神を受け継ぎ、写真を中心に絵画や彫刻など様々なジャンルの展覧会を開催。昨年には国内で約15年ぶりの開催となったロバート・メイプルソープの本格個展や、ギメ東洋美術館（パリ）とのコラボ企画として荒木経惟展を実現させる一方で、若手作家の発掘と紹介にも力を注いでいる。次回展は幻想的な作品で名高いサラ・ムーン写真展「D'un jour à l'autre 巡りゆく日々」（4月4日〜5月4日）を予定。

Q.リシャール・コラス社長、銀座でオススメのアートスポットは？

A.フォトギャラリー「写真を観るのも撮るのも好きなので、ニコンやキヤノン、ライカなどメーカー運営のフォトギャラリーが沢山あるのが魅力です」

東京都中央区銀座3-5-3 シャネル銀座ビルディング4F
Tel. 03-3779-4001 Open 12:00〜19:30 会期中無休

Adrienne sous la neige © Sarah Moon



サラ・ムーン写真展は日本初公開作を中心とした構成に。

Ginza Maison Hermès Le Forum

銀座メゾンエルメス フォーラム

世界的建築家のレンゾ・ピアノ設計によるガラスブロックに覆われた建物は、銀座のランドマークのひとつ。「日常の中で芸術を感じられるように」と設けられた8階の開放感あふれる展示スペースは来場客を楽しませる一方で、実力作家のみが使いこなせる難しい空間でもあり、国内外の旬な作家を紹介してきた。次回は日常に潜む複雑さを独特な詩的表現によって露わにさせる、マルセル・デュシャン賞受賞作家ミルチャ・カントルによる日本初個展「あなたの存在に対する形容詞」（4月25日〜7月22日）が開催。

Q.有賀昌男社長、銀座でオススメのアートスポットは？

A.銀座メゾンエルメスのウィンドウディスプレイ「若手作家を積極的に起用し、2カ月ごとに展示替えを行います。今年1月には100回目を迎えました！」

東京都中央区銀座5-4-1 8F
Tel. 03-3569-3300 Open 11:00〜20:00（日〜19:00） 不定休

The landscape is changing. 2012. Mircea Cantor. Courtesy of the artist and Magazzino, Rome

カントルはアルバニアで撮影したこの《The landscape is changing》に連なる新作を制作。

999 [ginza graphic gallery]

ギンザ・グラフィック・ギャラリー

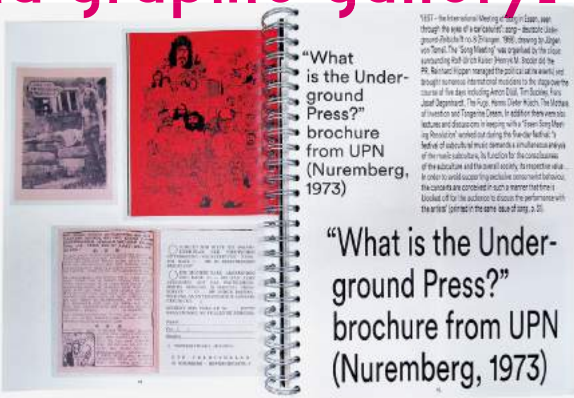
国内でも希少なグラフィックデザイン専門ギャラリーとしてDNP大日本印刷が1986年に設立（現在はDNP文化振興財団が運営）。歴史的な作家から新進の若手まで、小スペースながら美術館レベルの展覧会を目指す。活動を通じ伝えたいことは「〈コミュニケートする力、切り開く力、それが世界を変える〉ということ」。近年では、従来の印刷物から多様なメディアへ広がるデザイナーの動向も取り上げる。4月の企画は国際デザイン賞の作品展「TDC 2018」（4月4日〜28日）。

Q.gggさん、銀座でオススメのアートスポットは？

A.月のはなれ「大正6年創業の画材店、月光荘が手がけるカフェバーで、展覧会も開催。異国の屋根裏に入り込んだような魅惑的な隠れ家です」

東京都中央区銀座7-7-2 DNP銀座ビル1F
Tel. 03-3571-5206 Open 11:00〜19:00 日祝休

Prill Vieceli Cremers（スイス）の作品
「Under the Radar. Underground Zines and Self-Publications 1965-1975」（ブック）



2018年度TDC賞グランプリはブック形態をとったスイス人作家の作品。

THE CLUB

ザ クラブ

銀座 蔦屋書店と同じ運営母体のもと、日本ではまだ紹介される機会の少ないコンテンポラリーアーティストを積極的に紹介。世界的な最新の動向をキャッチしつつ日本の伝統工芸などと組み合わせて展示するなど、ライフスタイルに取り入れるアートのあり方を提案する手法に、こだわりが感じられる。次回展はアメリカのスタイル誌ヴィジョネアとの共同企画「THE CLUB X VISIONAIRE FETISH」（4月7日〜5月4日）。写真家スティーヴン・クラインをはじめとしたハイエンドな作家が集う。

Q.ディレクター山下有佳子さん、銀座でオススメのアートスポットは？

A.はまの屋パーラー日比谷店「ジェフ・クーンズなどの現代アートに囲まれながら美味しいコーヒーやサンドイッチがいただけます」

東京都中央区銀座6-10-1 GINZA SIX6F 銀座 蔦屋書店内
Tel. 03-3575-5605 Open 11:00〜19:00 不定休

Steven Klein. 2014. printed in 2018 © Steven Klein

次回展にはファッション写真家スティーヴン・クラインが参加！

HYATT CENTRIC GINZA TOKYO

ハイアット セントリック 銀座 東京

パブリックな空間で本物のアートに出合うことができる。そんな銀座ならではの伝統を受け継ぎ今年1月に誕生したこのホテルは、作品がとけ込んだインテリアが特色。例えば4階レセプション背面の、襖をモチーフにしたパネルに配された作品は、昼と夜で入れ替わり、場の雰囲気をガラリと変える。また、かつて大手新聞社ビルがあったという地歴にインスパイアされ、印刷機や活版文字をテーマにした装飾が館内の随所に施されている。アートとともに極上の時を過ごせる注目の最新アドレスといえるだろう。

Q.インテリアデザイナー赤尾洋平さん、オススメのアートスポットは？

A.銀座の裏路地「このホテルの内装を手がけるうえで、2丁目や6丁目に残る裏路地の古い町並みから大いに刺激を受けました」

東京都中央区銀座6-6-7 Tel. 03-6837-1234

Art work © Hiroki Tsukuda (NANZUKA gallery). Photo © Yoshio Shiratori

海外の展覧会でも注目を浴びる佃弘樹によるパネルは、銀座の街の断片をコラージュ。

POLA MUSEUM ANNEX

ポーラ ミュージアム アネックス

銀座の地で"芸術を通して美意識・感性を磨いていただきたい"と2009年にオープン。ポーラ美術館（箱根）のコレクションから注目の現代アートまで幅広いジャンルを紹介し、気負わずに立ち寄れる美術施設として親しまれてきた。現在開催中の「-イメージと投影-」展（〜4月22日）は『映像と動勢』をテーマに、公益財団法人ポーラ美術振興財団から助成を受けた若手4名をフィーチャー。また次回展は趣を変えて「田中 智 ミニチュアワールド〈Face to Face もっとそばに〉」（4月27日〜5月27日）を予定。

Q.ディレクター松本美貴子さん、銀座でオススメのアートスポットは？

A.ギャラリー小柳「日本のコンテンポラリーアートを育ててこられた、銀座を代表するギャラリーのひとつです」

東京都中央区銀座1-7-7 ポーラ銀座ビル3F
Tel. 03-5777-8600 Open 11:00〜20:00 不定休

村上亘「Still Life Tracing (Last Days in Karlsruhe)」2017年

若手作家をフィーチャーした「-イメージと投影-」展に参加の村上亘による作品。

Shiseido Gallery

資生堂ギャラリー

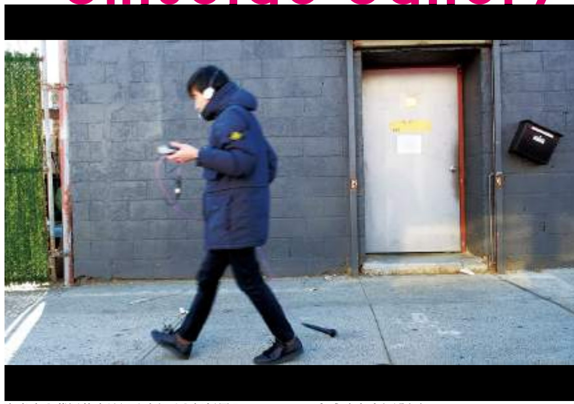
1919年のオープン時より「新しい美の発見と創造」を活動理念に掲げ、現存する日本で最古の画廊としてアートの街・銀座の中核を担ってきた。90年代からはコンテンポラリーアートを主軸に、未来を見据えた新進作家の発掘と紹介を積極的に行っている。「蓮沼執太：〜ing」展（4月6日〜6月3日）は、音楽の視覚的表現や作曲の手法を応用した展覧会など、多彩な活動で世界的に注目される気鋭作家の新作個展。人間と人間、人間と人間以外のものとの新たな関係性と共存について考察する。

Q.学芸員の豊田佳子さん、銀座でオススメのアートスポットは？

A.ギンザ・グラフィック・ギャラリー「スタンプラリーのイベントを共同で開催するなど、銀座でアートを盛り上げる心強い存在です」

東京都中央区銀座8-8-3 東京銀座資生堂ビルB1F
Tel. 03-3572-3901 Open 11:00〜19:00（日祝〜18:00） 月休

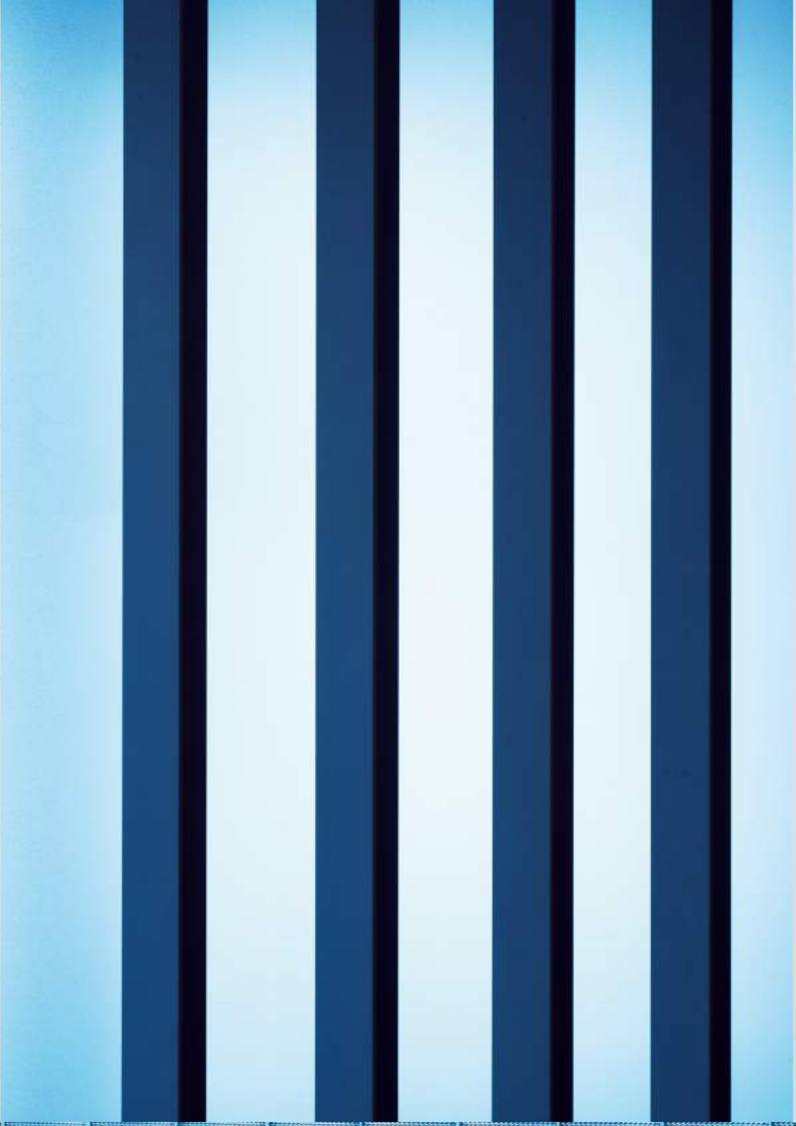
蓮沼執太「Walking Score in Red Hook, Brooklyn, New York」2018（スチール）

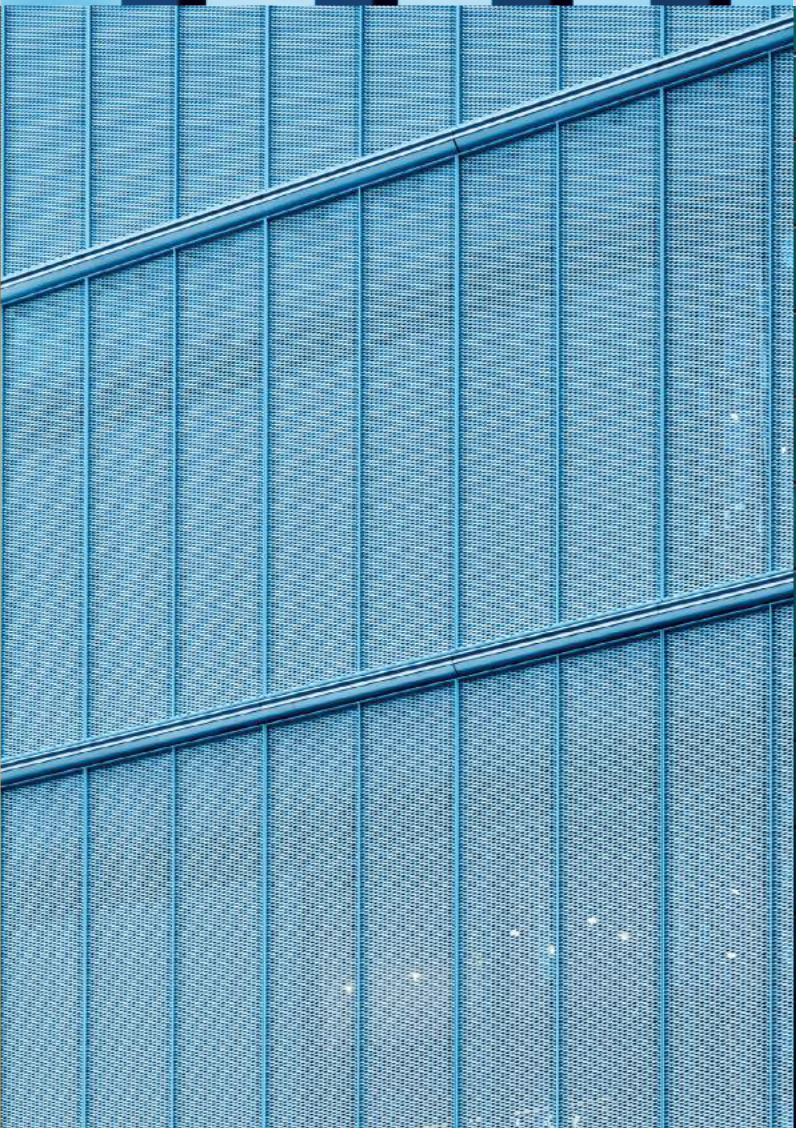


音楽家の蓮沼執太はアメリカでの初個展「Compositions」を成功させたばかり。

STRIPES ACROSS GINZA SIX

GINZA SIXの建築や空間に見るアートなストライプを収集。





GINZA SIX ART, WINDOW DISPLAYS, AND EVENTS

GINZA SIXの各店舗も、この春はアートを感じる様々な企画を発信中。ここでは12ブランドに注目。

diptyque Ginza [B1]

1961年に画家、舞台美術家、テキスタイルデザイナーの3名がパリで創業したディプティック。このほど最初のオードトワレ「ロー」の誕生から50年を祝し、サフィア・ワレスとディミトリ・リバルチェンコ、2人の注目アーティストがボトルのラベルを手掛けたオードパルファン「テンポ」と「フルールドゥ ポー」を3月1日から発売。それぞれの香りからインスパイアされた同アーティストによる限定ポスターも販売され、4月8日にはドリンクやフィンガーフードのサービスも実施。

Dimitri Rybaltchenko [LEFT]
パリ在住。旅や芸術や建築などに着想を得たイマジネーションあふれる世界観を表現。エルメスのカレ（スカーフ）の人気デザイナーとしても知られる。

Safia Ouares [RIGHT]
同じくパリ在住の女性アーティスト。ディプティックをはじめ各種ラグジュアリーブランドやファッション誌にイラストレーションを提供。映像なども手がける。

©Josie's RUNWAY

AHKAH [2F]

美術的な表現にファッションの感性を融合させた“世代や国境、時代を超えて愛されるジュエリー”をコンセプトとするアーカー。4月2日～5月6日には、アーティストのライブ衣装やキャッチーなイラストで知られる三浦大地のアートディレクションによるディスプレイのもと、コラボレーションネックレス（限定20本）を展示。4月20日の18時～20時には、上記のネックレス購入者のショッパーやボックスにアーティスト本人がイラストを描くイベントも開催。

Daichi Miura
ファッションデザイン、イラストレーション、アートディレクションなど多彩に活躍。ファンタジックでミステリアスな独自の世界観にファンが多い。

EYEFUNNY GINZA BOUTIQUE [2F]

各国の文化やアート作品からインスパイアされたダイヤモンドジュエリーも取り揃えるアイファニーでは、20世紀と現代美術のアートコレクターでもあるデザイナーがセレクトした絵画も展示・販売。注目は古典的な技法と柔らかなデッサンで知られるオメール・ベルベルとのコラボレーション作品。アンディ・ウォーホルが描いたマリリン・モンローへのオマージュをコンセプトにした作品は、油彩や水彩、チョーク、金箔などをミックスした技法が採用されている。

Omer Berber
1948年、旧ユーゴスラビア出身。1990年代から日本をはじめ世界各地で展覧会を開催、建築家としても多くのプロジェクトを手がける。イタリア在住。

DELVAUX [2F]

@DELVAUX

ベルギー王室御用達のレザーブランドで知られるデルヴォーのアイテムは、ルネ・マグリットをはじめベルギー出身のアーティストからインスピレーションを得た、革新的なフォルムと遊び心が息づく。4月29日と30日にはデルヴォーのスカーフのデザインを手がけるイラストレーター、バレンティン・デ・コートによるライブドローイングイベントを開催。参加者には彼女が描いたオリジナルのイラストをプレゼント！

Valentine de Cort
ベルギー出身のイラストレーター。パリ在住。ファッショナブルで軽妙なタッチを特徴とし、ブランドとのコラボレーションも多数。

CoSTUME NATIONAL [3F]

イタリアの注目アート雑誌『TOILETPAPER』や英国の高級車アストンマーティンとのコラボレーションなど、これまでもアート×ファッションを提唱してきたコスチュームナショナル。4月2日からは日本生まれの韓国人アーティスト、チャンガンリーの原画を展示。今季のコレクションテーマ“パンク”や“ダダイズム”からヒントを得た作品は、制作プロセスでは特定のテーマを持たず、独自の世界を表現。

PARIGOT [4F]

漆器 山田平安堂 [4F]

ChangGang Lee
東京を拠点とするコラージュアーティスト。1989年生まれ。古雑誌やペイントなどを組み合わせたアナログコラージュやミクストメディア作品を発表。

World Footwear Gallery [5F]

©PLUS M

“愛着”をテーマにクラフトマンシップが息づくレザーアイテムが揃うワールドフットウェアギャラリーでは、2カ月ごとにコンテンポラリーアートを入れ替え展示中。3月24日～5月6日は、互いにパートナー関係にあった草間彌生とジョセフ・コーネルの作品にフォーカスし、同時展示。コーネルのコラージュアートと並ぶ草間作品は、水彩とコラージュを駆使した彼女としては珍しい作品。コーネルへのオマージュとも囁かれる貴重な絵画をお見逃しなく。

Yayoi Kusama [LEFT]
前衛芸術家。1957年よりニューヨークを拠点に活動を開始。国内外での受賞（章）歴多数。2017年には東京・新宿に草間彌生美術館もオープン。

Joseph Cornell [RIGHT]
1903年、ニューヨーク出身。写真や骨董などを箱の中にコラージュをするアッサンブラージュの先駆者としても知られた。1972年没。

空間をデザインするアートディレクター佐藤寧子によるウィンドウディスプレイを打ち出す、パリゴ GINZA SIX店。多彩な素材を駆使し、見る人の五感を刺激する彼女の世界観は、GINZA SIXのB2Fのウィンドウディスプレイでもおなじみ。例えばこの3月は桜の塩漬けなどをカップに入れ、景色の一部までを体内に取り入れる贅沢を表現（写真上）。なお、パリゴでは3月16日から、ショップ発祥の地である瀬戸内デニムを使用したパリゴ キャットがウィンドウにお目見えする。

Yasuko Sato
空間系デザイン会社、プランクス代表。ユーモアとストーリーを信念に、主に店舗のアートディレクションやディスプレイデザインの分野で活躍。

Leica [5F]

© Ryoma Kashiwagi

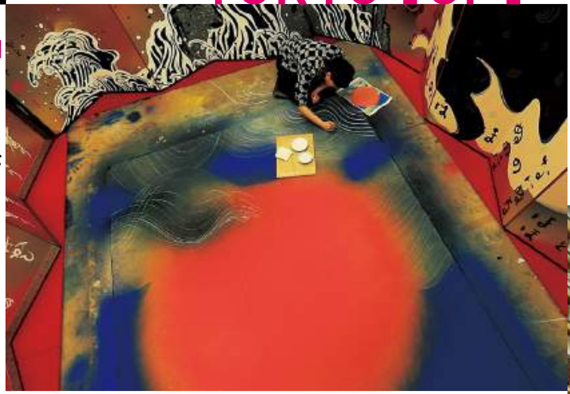
ライカが厳選したフォトグラファーの作品を展示するライカGINZA SIX店。6月19日までは、パリを拠点に活躍する柏木龍馬の写真展を開催。“avalon”と題した作品はアーサー王朝説をモチーフとして制作された3部作の序章で、伝説の島、または楽園の島を舞台に繰り広げられる刹那を群像によって表現。モノクロフィルムで撮影され、パリのプリント職人によりバタフライ印刷紙に焼き付けられた作品群は、重厚な黒のディテールにも着眼を。

Ryoma Kashiwagi
イスラエルを中心にドキュメンタリー・スペシャリストとして作品を発表。雑誌『NATIONAL GEOGRAPHIC』などを経て、2008年よりパリを拠点に活動。

宮内庁御用達の漆器で知られる山田平安堂は、先人から受け継いできた伝統を継承しつつ、現代のライフスタイルに合わせた新しい漆器を提案している。4月2日～11日には店頭で主要作家の展示・販売会を実施。中でも文政時代から続く漆工で、山中漆芸の重鎮であり昭和の名匠でもあった七代目呉藤友乗の作品は、そのダイナミックな絵付けや大らかなタッチが、没後17年の現在もコレクターから人気を集めている。

Yujyo Goto
1905年、石川県江沼郡山中町生まれ。祖父と父の友乗に師事。日本工芸会長賞など受賞歴も多数。昭和の名匠と呼ばれた。2001年没。

MARK'STYLE TOKYO [5F]



プレミアムなデザインギフトやステーショナリーを提案するマークスタイル トーキョーでは、店舗の一角にあるギャラリースペースで、毎回趣向を凝らした企画展を展開。4月2日からはGINZA SIX1周年のアニバーサリーセレクションのひとつとして、人気書家・紫舟による展示を実施。言葉が宿す力が書から溢れ出るその作品は必見。

Sisyu
NHK 大河ドラマ『龍馬伝』の題字をはじめ、2014年にはフランス国民美術協会展で日本人初の金賞を受賞するなど、世界的に活躍する書家の一人。

OKANO [4F]

時代ごとの芸術性を織り込んできた、日本の美意識の集大成である着物。数多くのアーティストや職人と協業するOKANO（オカノ）では、4月21日にGINZA SIXガーデン（屋上）で、現代アーティストの小松美羽によるライブペイントを開催。“死生観”や“神獣の世界”を描く彼女と緻密な職人技を誇るOKANOは、ともに“大和力を世界へ”がコンセプト。お互いの思いが共鳴したイベントは、裸足と素手でカンバスに向かう小松のパフォーマンスにも注目が集まる。

Miwa Komatsu
1984年生まれ。北京のTian Gala 2017にてYoung Artist of the Yearを受賞。2010年には有田焼の狛犬作品2点が大英博物館に所蔵展示された。

銀座 蔦屋書店 [6F]

ライフスタイル提案型の書店で知られる蔦屋書店。中でもここは「人の心を動かし生活を豊かに彩るアートをより身近に」との想いから“アートの民主化”をテーマに掲げる。4月17日～5月6日（予定）には「Hi-Market Ginza“Tea Tea Tea!”」を開催。ティー文化とアートを融合し、古今東西のお茶にまつわる書物や茶葉、デザイン性に優れた茶器などを集めたイベントやワークショップも用意。

ギャラリースペースでもある中央の空間は、これまでに杉本博司や名和晃平の作品展も開催されたGINZA SIXのアートスポットのひとつ。

GINZA SIX TOPICS

TOPIC 1
GINZA SIX 薪能特別公演

能楽最大流派である観世流の能の世界を堪能できる場として、GINZA SIX初の試みとなる薪能特別公演をGINZA SIXガーデン(屋上)にて開催します。

開催場所：
GINZASIXガーデン(屋上)
開催日時：
5月5日(土・祝)18:00開演
公演内容：狂言 柿山伏、能 土蜘蛛
主催：GINZA SIXリテールマネジメント株式会社
共催：一般社団法人観世会
お問い合わせ：
薪能公演チケット販売
(4/2販売開始)
チケットぴあ予約WEBサイト
http://w.pia.jp/t/ginza6n/
電話：0570-02-9999
(Pコード：485-540)
※詳しくはGINZA SIX公式WEBサイトをご覧ください。

TOPIC 2
GINZA SIX 親子能体験教室

GINZA SIX 薪能特別公演と同日に、日本の伝統芸能である能を身近に感じていただける「親子能体験教室」を開催します。能面などに実際に触れ、親子で謡や舞いの稽古が受けられる参加型のワークショップです。

開催場所：観世能楽堂(GINZA SIX B3F)
開催日時：5月4日(金・祝)、5日(土・祝)
各日 13:00-14:00/15:00-16:00
講師：山階彌右衛門他(5月4日)/
観世芳伸他(5月5日)
お問い合わせ：親子能体験教室
チケット販売(4/2販売開始)
チケットシステム(Peatix)予約WEBサイト：
http://g6noutaiken2018.peatix.com
電話：0120-777-581
※詳しくはGINZA SIX公式WEBサイトをご覧ください。

TOPIC 3
期間限定 POP-UP SHOP

[3F] CARVEN カルヴェン

1945年にフランスでマダム・カルヴェン(カルメン・デ・トマソ)が創立したブランド。彼女のモダンで洗練されたデザインは多くの女性を虜にしました。2018年春夏コレクションよりクリエイティブ・ディレクターにセルジュ・ルフューを迎えた新生CARVENがポップアップショップを開催。フローラルバードプリントやパームプリント、ストライプなど、プレイフルでユーモア溢れるパッチワークプリントに仕上げたキャンバストートバッグをGINZA SIX限定カラーで発売します。

開催期間：
3月28日(水)-5月1日(火)

[4F] クレ・ド・ポー ボーテ「ウェルカム ザ ライト オブ ア ラディアント デイ」
clé de peau BEAUTÉ "Welcome the Light of a Radiant Day"

シーンや気分に合わせて自分自身をエンパワーする最高のリップアイテムに出合えるポップアップショップ。どんなシチュエーションでも最高の自分を引き出してくれる「私だけのリップワードローブ」が、新たな生活のはじまりを輝かせます。今回のショップ限定で、名入れしたリップアイテムをスペシャルボックスに入れた特別なギフトも販売します。※名入れサービスは一部商品に限ります。

開催期間：3月28日(水)-5月1日(火)

[3F] ステート オブ エスケープ
STATE OF ESCAPE

オーストラリア発のバッグブランド〈ステート オブ エスケープ〉は"ユニークかつエッジーで、美しくデザイン性のあるキャリーオールをつくる"というコンセプトのもと、ネオプレン素材のボディにセーリングロープを使用したバッグシリーズを展開しています。GINZA SIXでは通常のハンドルにショルダーストラップも付いた、2WAY仕様の新作"プティエスケープ"のブラックカラーを限定先行発売するほか、定番人気アイテムも充実したラインナップが揃います。

開催期間：5月2日(水)-5月29日(火)

[4F] ヘザーブラウンギャラリー
Heather Brown Gallery

ハワイを拠点に活動するアーティスト、ヘザーブラウン。波の表情を描く力強いタッチと、アクリル絵の具の鮮やかな色彩のグラデーションが、まるでステンドグラスのような独特のスタイルを確立しています。GINZA SIXでは、希少なヘザーブラウンの新作原画を発表するほか、初公開となる日本限定アートプリントなどが揃います。なお、GW期間中の5月4日(金・祝)には、ハワイのカウアイ島よりヘザーブラウン本人が来日し、サイン会を開催予定です。

開催期間：5月2日(水)-5月29日(火)

[B2F] コンフェクション
Qonfection

「TOKYOグッドスナッキング」をコンセプトに、昨秋、西麻布に誕生した新プレミアムスイーツブランド。グルテンフリーとは思えない美味しさとおしゃれを兼ね備えたスイーツで食生活のスタイルが変わります。GINZA SIX 1周年を祝し〈コンフェクション〉から新登場するスティックケーキは、有機カカオパウダーを練りこんだ濃厚でしっとりとした生地に、色とりどりのクリームをサンドしたもの。銀座ならではの贅沢な味と大人な華やかさに溢れています。

開催期間：4月3日(火)-4月29日(日)

TOPIC 4
GINZA SIX アプリ

多様な機能が詰まったGINZA SIXアプリ。GINZA SIXでのショッピング体験をさらに充実させる機能が満載です。登録費・年会費無料。ぜひダウンロード・登録して、GINZA SIXでのショッピングをお楽しみください。

- お買い物時にアプリ提示で100円(税抜)につき1ポイントを付与
- GINZA SIXの最新ニュースや会員限定情報を配信
- 館内のショップやサービスをスマートにご案内
- 駐車場満空情報配信、バレーパーキング予約
- レストラン予約

アプリのダウンロードはこちらから
登録費・年会費無料

Download on the App Store
GET IT ON Google Play

※iPhoneはiOS9以上、AndroidはAndroid4.1以上が対象

4月5日(木)～4月8日(日)GINZA SIX ポイントアップキャンペーン開催！

TOPIC 5
GINZA SIX ぶらエディターズ

GINZA SIXの歩き方や楽しみ方を提案する人気コンテンツ「GINZA SIXぶらエディターズ」。公式WEBサイト、Instagram公式アカウントで配信しています。ファッション(メンズ／レディス)、ウォッチ&ジュエリー、ライフスタイル、ビューティ、フードといった各ジャンルに精通する個性豊かなエディターたちが、GINZA SIXをぶらぶらと歩いて見つけた楽しみ方を綴ります。

※なお、GINZA SIX 1周年を記念して、4月22日(日)にはマッキー牧元さんの「GINZA SIXはしご酒」の記事をもとに、体験型の「ぶらミーティング」を開催予定。参加条件等の詳細は後日Instagram公式アカウントにてお知らせいたします。

Instagram公式アカウントは「ginzasix_editors_official」で検索
#GINZASIX
#ぶらエディターズ

illustrated by Yu Nagaba

INFO

所在地：東京都中央区銀座6-10-1
営業時間：
ショップ　10:30～20:30
レストラン　11:00～23:30
※店舗、施設により異なります。
お問い合わせ：03-6891-3390
(GINZA SIX総合インフォメーション 受付時間10:30～20:30)
アクセス：
電車でお越しのお客様
東京メトロ 銀座線・丸ノ内線・日比谷線
「銀座駅」A3出口より徒歩2分
※東京メトロ 銀座駅、東銀座駅よりB2Fへは、直結の地下連絡通路をご利用いただけます。
車でお越しのお客様
駐車場をご利用ください。
収容台数　445台
営業時間　6:00～26:00
利用料金　300円/30分
※GINZA SIX各店舗でのお買上げに応じた割引サービスをご用意しています。
詳しくはGINZA SIX公式WEBサイトをご覧ください。
WEBサイト：https://ginza6.tokyo

PUBLISHER: GINZA SIX RETAIL MANAGEMENT CO., LTD.
EDITOR IN CHIEF: YUKA OKADA (edit81)
ART DIRECTOR: KENJIRO SANO (MR_DESIGN)
DESIGN: SHOTA HASHIMOTO (MR_DESIGN)
PHOTOGRAPHY: YUJI ONO (P.1), TERUYOSHI TOYOTA (STRIPES ACROSS GINZA SIX)
TEXT: AYA ITO・MARINA MENINI (DOMA/P.1), NAOKO AONO (P.2-3), AKIKO TOMITA (P.6-7), ASAKA IKEDA (P.10-11)
ENGLISH COPY BY RENDEZVOUS CO., LTD.
PRINTED BY KOHO CO., LTD.